

<30-03>

課 題 名	集落における移住者の受け皿体制づくり	地域づくり・ 絆づくり	南丹農業改良普及センター
(1) 普及指導事項（評価対象） 移住者（新規就農希望者）の受け皿ができるマニュアルづくり	(2) 普及指導対象 南丹市美山町平屋地区又林集落（19世帯53人）		
(3) 活動内容と成果			
<p>・移住者受け入れの集落内の合意形成を進めて行く上で、まず集落の役員が望む移住者（新規就農者）のイメージを明らかにするために意向調査を実施した。年齢層や家族構成など、地域が望む移住者（新規就農者）の具体像を集落内で共有した結果、集落内での移住者受け入れの合意形成が進みつつある。</p> <p>・移住者（新規就農者）の確保に向けて、情報共有した内容を基に、集落が求める移住者（新規就農者）向け条件提案書づくりを働きかけた結果、具体的な条件提案書づくりが始まった。</p>			
(4) コメント		(5) 普及指導計画への反映状況、今後の活動等	
<p>① 意識調査の結果は理想主義的なところにとどまっている。ネットやSNSなどでの情報発信、他地域の事例の情報収集等、他の地域との競合に対する取組をスピーディーに関係機関と連携して進める必要性があるのではないか。</p>		<p>① 意識調査について</p> <p>過疎、高齢化が進み、近い将来の集落機能や農地の維持管理に不安を抱える集落においては、ゆっくりと構えて考えている時間的な余裕は余りないかと思われます。</p> <p>ただ、このような集落の住民に働き掛け、住民それぞれが自分たちが居住する集落に対して、それまで、漠然と感じていた不安や課題を明確にし、その課題を解決するための取組の決定や取組を進めるための合意形成に至るまでには、一定の時間を要するものと考えています。</p> <p>このような合意形成に至るまでの過程は一見、迂遠のように見えますが、住民一人一人が自ら考え、自主的に動いていくことが課題解決のためには最も重要であると考えているところです。</p>	

(4) コメント	(5) 普及指導計画への反映状況、今後の活動等
<p>② 地域を再認識してもらったことができたことは何においても重要なことであったと考えます。しかし同じような環境や条件の他地域との競争に勝てる魅力発信が課題となると思います。集落の魅力を発信する仕掛けや仕掛け人について、大学などと連携し進めてはどうか</p>	<p>他地域の情報について、移住者がどのように地域へ受け入れられたか等の情報は参考になると考えておりますので、積極的に収集していく予定をしております。ただし、②に記載のとおり、他地域と競争することは想定しておりません。情報発信についてはネット等を用いることは非常に有意義なことと考えておりますので、集落や関係機関や団体との協議の中で、情報発信の方法等について検討していきたいと考えています。</p> <p>② <u>他地域との「競争」について</u></p> <p>本活動を進めるに当たり、関係機関や団体と連携を密に取り、また、集落住民と一緒に考えながら、数少ない移住希望者が、同じような情報の中から積極的に平屋地区を選択しようと思うような魅力のある情報発信や仕掛けが実践できればと考えています。</p> <p>そこで、本活動で「条件提案書」を作成することにより、その作成の過程の中で、住民の意識が移住受け入れに対して肯定的になることや受け入れ体制が整うこと、また、集落の魅力を盛り込んだ情報が開示されることにより、移住先の選択肢として選択され得る機会が増えることなどにより、他地域との差別化ができると考えています。</p> <p>○ <u>大学との連携について</u></p> <p>ご助言のとおり、大学などの仕掛け人の知恵は本活動を推進する上で非常に参考になると考えております。また、地域外の方々から見た集落の良さ（お宝）の発見は、住民にとって自分達が居住する集落の良さ、魅力を再認識する機会になると考えます。</p> <p>本活動の最終的な目標は移住者の獲得となりますが、その先には「他地</p>
(4) コメント	(5) 普及指導計画への反映状況、今後の活動等

③ 試行錯誤されて支援されていることが、とてもよくわかりました。当該地域の移住に伴って、求められるインフラ、教育、生活など多々ある問題を市町との連携を図りながら、より密な寄り添い方が必要だと思われま
す。同じような取組をしている他エリアの例を集めたり、直接話を聞いたり、また今回移住が実現した2家族にしっかりとヒアリングし、移住に必要な問題点の抽出を進めてほしいと考えるがいかがか。

④ 農業改良普及センターが実施される事業なので移住者＝新規就農希望者なのかサラリーマンの移住者でもOKなのか。想定されている移住対象者像の考えを教えてください。

域への波及」を目的としております。大学等との連携により様々な活動や仕掛けをすることは効果的と考えております。現時点では連携については想定しておりませんが、他地域でも取り組みやすい方法を検討してまいります。

③ 移住希望者のインフラ（学校、医療機関等）や買い物等生活についての要望は、市町や府関係機関、移住に係る NPO 等で構成する「移住定住ワーキングチーム」から情報を得ているところです。移住後の生活で出てくるであろう生活面での課題について、関係機関が連携して対応できるように、今後も市町等関係機関と情報共有を密にして取組を進めていく予定です。

移住された2家族に対しては、農事組合長も「何故、本集落に移住したか」を聞きたいと話されています。このことについては、普及センターも聞き取りが必要と感じており、今後、移住希望者とのヒアリングや集落側の受け入れ体制整備に向けた協議の際のポイント整理に活用できればと考えています。

④ 当初は、普及センターが行う活動ですので、「新規就農者」の確保と集落の移住者の受け皿づくりとして取組を始めましたが、当該集落の農地面積は4haとわずかであり、集落役員の意識としても水田（水稻）＋大豆作を任せられる人物が希望であることが判明し、「半農半X」で生活ができる人が適当かと判断しています。

「『農地を守る』＝雑草を生やさない（荒廃農地にしない）。オペレーターがいる」あたりが、集落の方々の要望ではないかと考えています。

(4) コメント	(5) 普及指導計画への反映状況、今後の活動等
<p>⑤ 移住者向け条件提案書という言葉・表現について、これでなければ、来ては困るというイメージを受ける。「共同生活提案書」あたりのほうが良いと考えるが、表現方法を検討願う。</p>	<p>いずれにしましても、集落住民がどのように考えているかが大切であると考えています。</p> <p>⑤ 御指摘いただきましたように「移住者向け条件提案書」との表現は集落側から見た表現であり、一方で、「そんな気持ちで移住して来てもらっては困る」との意味合いにも受け取られるところが確かにあります。「条件提案書」の表現につきましては、今後、検討していきたいと考えています。</p> <p>移住希望者に対して、集落内の情報だけでなく、地域のインフラ(学校、医療機関等)や買い物等生活に関わる情報を移住の際に示すことにより、移住を検討している集落が、自分が本当に移住したい集落なのかを判断していただく材料になるものと考えています。また、このような情報を示すことによって、移住後に、移住者、集落側ともに「こんな筈ではなかった」といった双方の思いの行き違いがなく、win-winの関係が築ける一助になるものと考えています。</p>